

第75回税理士試験「財務諸表論（理論問題）」と本書（第8版）との関連

令和7年（第75回）

〔第一問〕 - 25点 -

問1（4点）

(1) a ア (2) b ウ

♪ 問1は、概念フレームワークを思い出せなくても、本書を利用している受験生なら自信をもって正解できるはずである。

問2（11点）

(1) 帳簿価額 ♪ 第8章4節1（2）問1④と同一問題

(2)

A.	引当金処理は、将来の有形固定資産除去時の支出見積額を、その資産の使用に 応じて各期間が負担すべき除去費用として配分し、それに見合う金額を引当金 として每期積み増していく方法である。
B.	引当金処理では、資産除去費用が支出される前の各期間において、その債務の 一部しか計上されないから、貸借対照表への負債計上額としては、不十分とな る。

♪ A.B.とも第8章4節1（1）問3①と同一問題、なおBの解答については、本書では、3つあげているが、出題意図からこのうちiのみを解答例としている。

問3（10点）

(1) a 交換 (2) b オ ♪ 第3章3節1問1と同一問題

(3) イ

♪ 問題イの文章で、第3章3節3（1）問1の文章と異なる箇所：

誤「…影響を与えない…」 ⇒ 本書では、正「…影響を与える。」

(4)

所有権の有無にかかわらず、資産の使用を指図し、そこから残りの便益のほとんどすべて を享受する能力（他の企業から資産の使用を指図してそこから便益を享受することを防げる 能力を含む。）である。
--

♪ 「資産に対する支配」の定義を問う問題である。第3章3節4（1）問1に解答となるそのまの文章がある。「支配概念」については、第1章3節3問3 ♪ 及び第6章5

節2 問2 でも説明している。支配概念は、資産の本質との絡みで重要である。

〔第二問〕－25点－

問1（計13点）

問1に係る本書の関連箇所は、すべて第8章4節2にある。従って、以下における関連箇所については、同節2の次の項のみを示すこととする。

(1)

①	2,550	千円
②	16,450	千円
③	41,900	千円

♪ ① 退職給付費用の計算：（単位：千円，以下同じ）（3）問7 ♪ の図

i 過去勤務費用の償却額	300	iv 期待運用収益	750
ii 勤務費用	1,400	退職給付費用	2,550
iii 利息費用	1,600		

i 期首過去勤務費用発生 $3,000 \div \text{償却年数 } 10 = 300$

ii 勤務費用は、問題の【前提条件】に記載 1,400

iii 期首退職給付債務残高 $40,000 \times \text{割引率 } 4\% = 1,600$

iv 期首年金資産残高 $15,000 \times \text{長期期待運用収益率 } 5\% = 750$

② 年金資産の期末残高：

期首年金資産残高 $15,000 + \text{前問①の iv } 750 = 15,750$

年金資産（基金）に掛金支払 $1,500 - \text{基金からの支給 } 800 = 700$

合 計 16,450

③ 退職給付債務 （3）問7 ♪ の図

企業より年金支給	0	期首残高	40,000
企業より一時金支給	1,100	勤務費用	1,400
期末残高	41,900	利息費用	1,600

(2)

年金資産は退職給付の支払のためのみに使用されることが制度的に担保されていることなどから、これを収益獲得のために保有する一般の資産と同様に企業の貸借対照表に計上することには問題があり、かえって、財務諸表の利用者に誤解を与えるおそれがあるから。

♪ (3) 問7 ①と同一

(3)

過去勤務費用の発生要因である給付水準の改定等が従業員の勤労意欲が将来にわたって向上するとの期待のもとに行われる面があるから。

♪ (4) 問3 ②-1 と同一

問2 (計 12 点)

問2に係る本書の関連箇所は、すべて第7章1節2(2)にある。従って、以下における関連箇所については、その問番号のみを示すこととする。

(1)

①	210	千円
②	13,000	千円

♪【前提条件】に記載の項目を問2の該当箇所(会計処理番号)に振分けて問題を整理すれば容易に解答できる。(単位：千円)

項 目	本書番号	科 目	金 額
・ A の購入	⑧	無形固定資産	1,000
・ A の仕様修正	⑧	無形固定資	50
・ A の利用研修	期間費用	(研修費)	20
・ B の製品マスター完成まで	③	研究開発費	10,000
・ C の製品マスター著しい改良	④	研究開発費	3,000
〃 当期非製造	期間費用?	?	2,000

問題①の計算： ソフトウェア償却費

無形固定資産(ソフトウェア)の取得原価÷償却年数 $(1,000+50) \div 5 = 210$

問題②の計算： 研究開発費 $10,000 + 3,000 = 13,000$

(2)

a	ウ	b	カ
---	---	---	---

♪ 問3 ①の設問及び問2 ♪ と同趣旨

(3)

次の3つの理由による。①製品マスターは、それ自体が販売の対象物ではなく、機械装置等と同様にこれを利用(複写)して製品を作成すること。②製品マスターは、法的権利(著作権)を有していること。③適正な原価計算により取得原価を明確にできること。

♪ (2) 問3 ②と同一問題

第75回（令和7年）財務諸表論の理論問題に対する感想

本年については、比較的にもともな問題が多く出題されたように思う。

出題は、受験生の学力が正確に反映されるようになされなければならない。まじめに懸命に勉強した受験生には高い得点が得られるように、専門家としての知識や理解が水準に達しない受験生には実力を高めてさらなる勉強を促すように出題されるべきなのである。しかし、最近の出題傾向は、本質と関係の少ないやたら細かい箇所から出題したり、会計学者でも一筋縄では解けない難問が出題されることもある。出題意図に疑問が残る問題や超難問は、時間的制約があるなかで、いわゆる「できる受験生」でも正解できる人は皆無である。その結果は受験生の実力を正確に反映しているとは言い難い。出題の量と質で試験委員の能力が問われているのである。執筆者代表が受験していた頃は、易しく見えても実力がなければ解けない問題で、模範解答をみて振り返ると「なるほど！」と会計の本質を考えるきっかけとなる問題が多かったように思う。超難問等は、試験委員にとって採点は楽かもしれない。しかし、採点作業を楽しんで行い、学者としての地位や名声を得ただけの人は、受験生を犠牲にして百害あって一利なしなので、はじめから試験委員を受諾しないでほしい。

執筆者代表は、学生時代に高名な会計学者で試験委員をなされた何人もの学者から教えをうけた。それらの学者から聞いた感動的なエピソードがいくつもある。監査論の大家である元試験委員は、試験問題として、「必ず監査手続も出題します。監査手続は、監査事務所で働きながら勉強している受験生へのエールで、実務経験のない受験生にとっては難問だからです。そして、試験は、夏の暑い時期に行われるから、解答用紙に汗の落ちた跡が付いて文字が滲んでいることがある。汗跡がある解答用紙をみると思わずガンバレと心で叫びながら応援する気持ちで採点しました。」というのは、その一例である。受験生に愛情のある試験委員であれば、自ずと問題の質や量は、適切なものにならざるを得ない。現状のままでは、資格のためだけの受験生が多く集まり、簿記・会計そのものに興味をもって学ぶ若者はますます少なくなっていくように思われるのである。